

小原芳明 監修

2000 12

No.630

Zenjin Magazine

玉川学園

# 全人教育



## ベルリンフィル・ヴァイオリン奏者 アマデウス先生の特別レッスン報告

——「ほんもの」から学ぶ機会——

大谷 千恵

(玉川学園全人教育研究所研究員・英語講師)

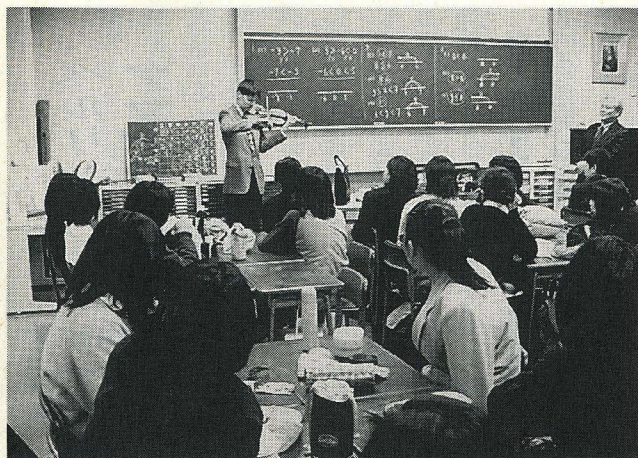
「あとX週間、玉川学園に行けます！」

一〇月に入ると、毎週のようにアマデウス先生から私のオフィスにファックスが入りました。アマデウス・ホイトリンク (Amadeus Heutling) 先生は、世界で活躍しているベルリン・フィルハーモニーのバイオリニストです。オーケストラだけでなく、ソロやカルテットでも活動されているとともに、ベルリンの芸術大学では若い音楽家の卵達を育てていらっしやいます。

アマデウス先生とは、二年前に芸術学科で行われた特別レッスンで初めてお目にかかりました。この時、私は通訳としてお手伝いさせていただいたのですが、「音楽家以外の方と知り合う機会があまりないので、あなたの生徒や学校について、もっと教えてください。」というアマデウスさんのお言葉で、私が中学部で実践している英語のOnline授業を紹介させていただきました。そして、インターネットを通して、私の授業の様子や生徒達の取り組みの様子、発表の様子などを見ていただきながら交流が深まっていきました。「私は自分でバイオリンを弾くことも大好きなのですが、若い人達に音楽を通して芸術の素晴らしさ、人生の素晴らしさを分かちあえる時が一番楽しいです。」と、教育に強い関心をお持ちのアマデウス先生は、インターネットを通して、生徒達に素敵なメッセージを送ってくださいました。

「全ての音色は演奏者の血が通った体のように人生に溢れていなければなりません。テクニクだけで終わらせることは決してできないのです。音楽をつくる

時は、夢中であること、そして「感」に触発される (inspire) ことです。そしてどうぞ覚えていてください。楽器を奏することは芸術です。ですから他の芸術も知ってください。劇場へ行ったり、絵画を見たり、本を読んだり、人々を観察したり、人生を生きること



中学部生の熱烈な歓迎のお礼に一曲

が、あなた自身の芸術の創り方に影響するのです。他の人の真似をしてはいけません。ありのままの自分らしく、ますます自分らしくなっていくのです。」  
このようなアマデウス先生のメッセージから、音楽家としてだけでなく、その内面から溢れ出る人格の素晴らしさを感じました。そして、もし玉川学園にまた来ていただけるのであれば、中高生にも「ほんもの」から学ぶ機会をつくりたいと思いました。さっそく、CHaT Netでアマデウス先生からのメッセージをお知らせしたところ、高等部の長谷部先生が興味を持ってくださり、玉川学園オーケストラの特別レッスンのために色々とお世話になりました。今回の特別レッスンは、芸術学科の藤本晃先生をはじめ、多くの先生方のご理解とご協力があったからこそ実現することができたと思っております。

芸術学科は十一月二〇日(月)、玉川学園オーケストラは十一月二四日(金)に公開レッスンが行われました。今回のベルリン・フィルの来日演奏曲目にはワグナーの「トリスタンとイゾルデ」という五時間に

もわたるオペラの大作があり、体力的にもきついスケジュールであったと思われませんが、アマデウス先生は精力的に生徒と交流されました。

十一月二〇日

リハーサルの予定が少しズレて玉川学園に昼頃来られることになりました。「早めに玉川学園に行ってもいいですか? え、昼食の時間ですか。では、私も中学生と一緒に昼食ができますか? 私は日本の生徒をよく知らないのです、二四日に教える生徒達がどんな学校で、どんな生活をしているのか知りたいのです。」と積極的に行動されます。もちろん、中学部も喜んで歓迎してくださったので、オーケストラ部顧問の鈴木先生の教室で中学部生とのお弁当を体験されました。先生達からの熱烈な歓迎に感激され、歌のお礼にバイオリンで一曲プレゼントしてくださいました。

午後、一時間ほど練習をされてから、芸術学科の公開レッスンのため音楽教室に向かわれました。学生から「どのように音楽にアプローチされますか?」という質問に対して、「これがあなたの人生で最初で最後

の演奏だと思って演奏してみてください。」とおっしゃったことが印象に残っています。ユーモアを交えて、「実際、本当に最初で最後になるかもしれませんし。そんなこと誰にもわかりませんしね。」と、ニッコリされました。

十一月二四日

玉川学園オーケストラの特別レッスンはチャペルで行われました。「十一月二四日は、新しいチャペルが素敵な音色で満たされることでしょう。とてもわくわくしています。」と、中学部生がアマデウス先生に送ったメッセージの言葉通り、美しい音楽と音楽を愛する者達の気持ちでチャペルは満たされ、和やかな雰囲気の中でレッスンが行われました。

アマデウス先生の一言一言を吸収しようとする生徒達の真剣さと中学生や高校生にわかりやすく指導しようとされるアマデウス先生の熱心さが伝わってきました。特別レッスンの後に、音楽科の先生方数名から色々な質問をお受けになった時に「僕のように特別な機会に生徒を見ることは簡単なことです。生徒も特別

だと思っから一生懸命にやるでしようし。でも、一番大変でとても尊いのは『日常』の中で生徒達を教えていらつしやる先生方だと思いますよ。バイオリンを小さい時に始めた生徒や中学生になってから始めた生徒がいる中で、オーケストラとしてここまで指導されている音楽科の先生方こそ素晴らしいと僕は考えます。」と教師の苦勞や尊さについても触れられました。

これらの二日間の特別レッスンの他にも「どうか私にもレッスンをしてください！」と自分から向かってきた生徒達に対しては、貴重なお時間を割いて下さり、個別のレッスンもしてくださいました。そんな個別レッスンの中で印象深いのは、「数学も、理科も、外国語の授業も、どの授業もとても大切です。音楽が好きだからといって、音楽だけをしていても、いい音楽家になれるとは限りません。僕自身、サッカーもテニスもしますし、本を読んで勉強もします。今、自分に与えられている機会（学校の勉強にしても、玉川学園にしているにしても）を当り前ととらえずに、その恵まれた機会を十分に生かして、自分の人生を豊かなもの

にしていってください。」と、人生の大切さや日々の大切さをわかりやすく、さりげなく話されたことです。このような中高大にわたつての特別レッスンを、一回のイベントで終わらせてしまつてはもつたない、また当日参加できなかった学生や生徒、保護者、教職員の方々にもこの素晴らしい経験を共有していただきたいと思ひました。そこで、教育の財産として、当日のレッスンの様子やアマデウス先生と生徒達とのやり取り、質疑応答などをホームページに掲載しました。アマデウス先生にとつても指導の記録として残るということ、喜んで協力してくださいました。帰国されたら、さつそくホームページを見てくださるとのことです。そして、冗談まじりにですが、「世界初のベルリン・フィルと玉川のOn-line授業がいつか実現するんじゃないですか？」とおっしゃっていました。

特別レッスンのホームページ

<http://www.tanagawa.ac.jp/sisetu/kyouken/amadeus>

アマデウス先生特別レッスン

## 玉川学園オーケストラ のレッスン

——聴く耳——

長谷部 啓

(高等部教諭)

一月二四日(金)、チャペルにおいてアマデウス先生に特別レッスンをして頂きました。受講者は玉川学園オーケストラの中・高弦楽器奏者です。中学部生は全員でチャイコフスキー作曲の「弦楽セレナーデより第四楽章」を、高等部生はハイドン作曲の「弦楽四重奏No.42」とヴァイオリンソロとしてサン・サーンス作曲の「ヴァイオリンコンチェルト第三番より第一楽章」を特別レッスンをして頂きました。世界一と言われるオーケストラの演奏者から、目の前で本物の

音を聴きながらレッスンを受けられるという、またとないチャンスに、メンバーは緊張と期待を一杯にしてチャペルに集まりました。アマデウス先生のレッスンは中・高生に分かりやすい言葉と説得力のあるヴァイオリンの響きで進められました。また、一人ひとりへの確な練習方法のアドバイスもあり、各レッスン時間は瞬く間に過ぎていきました。どの演奏も先生の一言一言で見える間に曲に込められたメッセージがはつきりし、立体的な響きに変化して行く様子が演奏者・聴衆共に実感できたと思ひます。レッスンの後、先生から幾つかのコメントがありました。その中の一つを最後にお伝えします。「玉川の生徒は聴く耳があります。特別レッスンという事もありますが、私のヴァイオリンの音とアドバイスを集中して良く聴いてくれました。この聴く耳があるからこそ、自分の音楽を人に伝える事ができるのです。音楽をする大事な要素を玉川の生徒は自然に身に付けています。この聴く耳は音楽以外の全てにも通じる非常に重要な事です。これからこの聴く耳を大事にして欲しいと思ひます。」



高等部弦楽四重奏を指導するアマデウス先生

中学部三年 岡野 麗子

待ちに待っていたアマデウス先生のレッスンの日、期待と緊張でわくわくドキドキでした。高等部生のカルテット、ソロの演奏に続き、いよいよ中学部生の演奏です。コンクールで演奏する曲を聞いて頂きました。

「ワンダフル！」と手を叩いて下さり、「ホッ」としました。「もっとテンポをあげて」「弓の使い方はこう使って」等、技術的な事と音楽的な事を教えて頂きました。注意されたところに気をつけて演奏すると、みんな上手になった気になり、先生に褒められると、更にもうれしくなりました。先生の独奏はとても素晴らしい演奏でした。曲の情景が浮かび、語りかけられているように心に響きました。とても暖かい音楽でした。

高等部二年 谷塚 亜美

舞台上に立っている私は、今まで感じたことのないプレッシャーに押し潰されそうでした。私は短い練習期間の中で技術的な事を中心に練習してきましたが、自分の技量の未熟さ故に「こんな私では公開レッスンを受ける資格がない」という気持ちで一杯でした。ところが、いざレッスンが始まるとアマデウス先生は、技術的な事よりも、もっと広い目で音楽をとらえ、より大胆で深く、それでいて繊細な演奏を聴かせて下さるレッスンをして下さいました。それは、技術より、何より音楽をする心だったと思います。

アマデウス先生特別レッスン

## 芸術学科の 公開レッスン

—— 感じたままの演奏を ——

藤本 晃

(文学部教授・芸術学科)

アマデウス・ホイトリンク先生による公開レッスン  
が左記のプログラムで行われた。

・ 菅原大周 (Prelude, From Partita for violin solo No.3  
in E major BMV 1006 by J. S. Bach)

・ 勝山美樹 (Violin concerto in e moll 1st mov. by  
Mendelssohn)

・ String Quartet (菅原・勝山・香月・松島)

String Quartet OP.64-5 (The Lark) 1st mov. By Haydn

・ アマデウスさんの実演

ホイトリンク氏とのご縁は二年前に、当時サントリ  
ーホールの事業部におられた森川俊子さんからのご紹介  
で始まり、今回で二度目の来園となった。二年前の  
時も今回と同様に、なごやかな雰囲気の中にも緊張感  
のある素敵なレッスンを展開された。彼の父君、ヴェ  
ルナー・ホイトリンク氏も著名な音楽家で現在も、ド  
イツで御活躍中。以前にはハノーヴァー歌劇場のコン  
サートマスター、ハーヴァー音楽大学の教授も務めら  
れ、一九五八年にはホイトリンク弦楽四重奏団を結成  
された方である。一九七六年に初来日し、「知性と情  
熱・均衡のとれた着実な演奏を聞かせる四重奏団」と  
いわれ絶賛された。アマデウス氏の持つ、知的な解釈、  
すばらしい感性、完璧ともいふべきテクニックを目の  
あたりにした時、彼自身の並々ならぬ修練の結果はも  
とよりであるが、やはり前述の著名な音楽家の集う、  
ホイトリンク家の中で育った英才であろうことは疑う  
余地がない。学生一人ひとりに対するレッスンも、先  
ず誉めることからラックスさせ、徐々に細かい要点  
にせまるやり方は、前回と同様感心させられるものが  
あり、教師側にとっても参考になったと思う。



芸術学科生への弦楽四重奏のレッスン

奏することで、美しいフレーズやメロディ、曲の息使いを心で感じることができるようになったのです。改めて、ヴァイオリンを弾くことが好きになりました。

芸術学科三年 菅原 大周

レッスンにあたっての課題は、これまで学習したことを緊張しないで表現することでしたが、そのことについてはなにも指摘されませんでした。しかし楽器の保持について注意され、改めて原点の大切さを痛感しました。そして独奏と弦楽四重奏の両方のレッスンで、今後の課題が与えられ、貴重な体験でした。

芸術学科一年 香月 圭佑

カルテットのチェロパートの役割をハイドンの「ひばり」を通して、「チェロは柔らかい響きのある音を」「スフォルツァンド（特に強く）の時に力まかせに弾かないで弦の響きにスピード感をもたせるイメージで」「このメンバーで多くの曲に挑戦すればカルテットの楽しさが理解できる」と指導を受けました。これを教訓に今後も続けたいと思います。

芸術学科四年 勝山 美樹

先生が「楽譜を見ないで、自分で感じたままに自由に弾いてみなさい」と楽譜を閉じてしまいました。その瞬間、音符にばかりとられすぎて、自分の演奏ができていなかったことに気づきました。感じたまま演

## 「女子短期大学展」を終えて

山本 真功

「女子短期大学展」は、女子短期大学関係者の集まりである。この集まりは、女子短期大学の現状や将来について、関係者同士の意見交換の場として、また、女子短期大学の魅力を広く社会に発信する場として、重要な役割を果たしている。今回は、この集まりに参加した関係者の声や、女子短期大学の現状について、山本真功先生に話を聞いた。

山本先生は、女子短期大学の現状や将来について、関係者同士の意見交換の場として、また、女子短期大学の魅力を広く社会に発信する場として、重要な役割を果たしている。今回は、この集まりに参加した関係者の声や、女子短期大学の現状について、山本真功先生に話を聞いた。